

1/10
五五

四国電力伊方原発（愛媛県伊方町）の重大事故を想定した原子力総合防災訓練が8、9の両日、住居と、国や県、四電など100余の機関が参加して行われました。愛媛県や伊方町は訓練を前に再稼働に同意しています。避難計画に実効性はあるのか、検証を行うなどと考えた訓練。行政の手順の確認ばかりが優先され、住民避難の具体的な検証とは程遠いものでした。



住民を運ぶとしています。9日午前中、佐田半島港を待つ抗議行動をしていました。「伊方原発をとめる会」の和田事務局長は、港を出ていく海上自衛隊艦船で訓練参加者が外に出ているのを見ながら、「被ばくするという臨場感もないし、緊迫感がない」と感じていると指摘します。

伊方避難訓練

原発の横を!?

れ出すという想定で行われました。国や県の計画では、伊方原発で重大事故が発生した場合、原発から5キロ圏（PAZ）に住む伊方町の約5500人は放射線物質が放出する前に即時避難し、5〜30キロ圏（UPZ）の5市3町の約11万8千人は放射線量に応じて避難します。伊方原発の西側5キロ圏の佐田半島に住む約4900人も、陸路での避難に半島の付け根にある原発の真横を通らなければならぬため、5キロ圏と同じタイミングで避難する「予防避難エリア」になっています。半島は細長く長さ50キロに及びます。原子炉から放射線物質が漏れ出し、陸路での避難が難しくなった場合、計画では「予防避難エリア」は、大分県の佐賀関港まで船で片道70分かけて



四国電力伊方原発
10月、愛媛県伊方町

検証形だけ



①一時集結所の体育館で「ウチを」を受け取る訓練参加の住民ら9日、愛媛県伊方町
②避難先の佐賀関港に到着し、フェリーから降りてくる訓練参加者と隣接する自治体の職員ら大分市

不安消えず

ウチを配布されました。負っていました。「こういう事態を想定しないといけない」ということ自体が大変なことですが、大きな地震が起きたら、家からほんとうに港に来る。仮避難所が移動し、健康状態の再稼働には反対です」と「初めて県外避難の訓練でしたが、実際の事故があった場合、県外にこれだけ

県外へ船で!?

フェリーには11地区から引人が放射能汚染の検査をして乗船。港に来る前の一時集結所で被ばくを防ぐヨ

「再稼働のアルバイトづくり」

の期間、避難することになったのか、今日はどんぼ返りでした。訓練では分刻みで行動しましたが、トラブル、事故など想定できないことに不安が残ります」と話すのは塩崎幸生さん（57）。地区から4人が参加したという中村孝さん（57）は、原発の方へ向かって逃げるのは無理。逃げるなら海しかない。もし伊方原発で事故が起きたらどうなるの心配。その心配を解消するのが訓練だと思いが、今回、大きく役立つことはなかったです。佐田半島には、小さな地区が離れて点在しています。避難の際には地区ごとに行き、さらに複数の地区が集まる一時集結所へ移動します。そこから半島を出る避難経路を進み、またさらに大きな避難所へ移動します。9日の訓練では、陸路をバスで避難する訓練も行われました。各地区の区長や役員ら43人が一時集結所の潮音総合体育館に集合。バスに乗り込んで70分余りの道のりを約1時間半かけて、松山市に近い松前公園体育館まで移動しました。訓練に参加した元三机区長の川田健二さん（69）は「この一時集結所に集まるまでが大変だといえます。合理的な」として安否を相の了承を得ていました。